

経線

学際研究と 若者たち

近年の著しい大学改革の波の中で人文系に属する者ならば、〈学際研究〉なるものとその教育をめぐる議論に、必ずや巻きこまれているに違いない。ご多分にもれず〈比較文化〉という看板を早くから掲げている学類(=学部)で、比較文学を教えている私は、日々その問題で頭を悩ましていくのが実情である。文学のみならず、地域研究、科学史、地理学、マスコミ論、現代文化論など、それこそ多種多様な専攻の学生たちが同じ学類で学んでいるのだから、演習などでは、テーマの設定が至難の技である。私自身の専門を生かしながら、文学作品を読解する場も設け、しかも比較研究の視点や方法論を訓練する——1年間のカリキュラムで、それは理想論でしかないのかもしれない。昨年からは〈東京論〉に取り組んでいる。嬉しいのは、参加した学生たちが意外なテーマを自分で見つけてきて発表し、普段は滅法おとなしい彼らが、かなり盛り上がった議論をしているのを見る時である。中には、

緯線

今橋映子

(比較文学・比較文化)

明治の貧民ルポルタージュ作家松原岩五郎などに目を付ける者がいる一方で、サイバースペースと都市表象、〈渋谷系〉の現在若者文化、ディズニーランドなど、リアルタイムの事例に関心を示す発表が続くのは、さすが若者らしい感性である。発表もビデオあり、音楽ありで、自分が学生だった頃を考えると(何年も経ていないはずであるのに)隔世の観がある。都市論といえば、一昨年度の大学でベンヤミンの『パサージュ論』の断片を提示して、そこから自由にレポートを書かせたところ、実際に駒場から渋谷までを「遊歩し」、それをアフォリズム形式に仕上げてきた学生がいた。ちょっとベンヤミン風の味付が効きすぎているものの、高級住宅街に「展示」された外車や、ラブホテルの突然の出現など、都内ならではの風景をキャッチした軽快な筆が快い。〈学際研究〉の1つの良さは、現代の若者たちからこうしたしなやかな感性を見逃さず引き出すことだろうか。

経線

俳句の詩学

はっきりと意識したことはないのにどこか待ち続けていて、手に取ったとたん、あ、この本だと思ふ瞬間がある。夏石番矢編『「俳句」百年の問い』（講談社学術文庫、'95）は、そんな一冊だった。正岡子規以来、明治から今日まで書かれた32編の「俳句本質論の選りすぐり」である。碧梧桐、秋桜子、井泉水といった、誰もが思いつく歴代の実作者のみならず、外国人を含む研究者、評論家、小説家による論文まで、広く収録してある。しかも嬉しいのは、これが単なるアンソロジーではないという点だ。この32編が、編者自身度々携わってきた近・現代俳句資料の総括的見直し、目も眩むような作業からこぼれ落ちた珠玉の数滴であることが、私のような素人にさえ推し量られる。

奇妙にも、この本を手にして思い出したのは、昨年邦訳が完結したヴァルター・ベンヤミンの『パサーージュ論』（岩波書店）だった。——19世紀パリについてのあらゆる言説を渉猟し、引用の

緯線

今橋映子

(比較文学・比較文化)

みから織り上げられた一冊の書物を夢想したベンヤミン。引用の群というメタ・テキストを前にして、私たち研究者は普遍的にげなく用いている「学術論文」というスタイルそのものの再考を強いられたのではなかったろうか——。

夏石氏は、明治から現代へと編年体に並べられた諸論の最後に、解説の形で、「俳句という多面体宇宙の詩的原理の解明を目指し」、〈映像生成〉〈断片性〉〈キーワード詠〉〈無意識の鏡〉〈新奇性〉といった、刺激的な項目を挙げて、自ら選択した「引用」を再分類、考察している。まさしくそれは「俳句とは何か」というこの百年の問いに対する、編者自身の一つの回答の試みであろう。川本皓嗣氏（『日本詩歌の伝統』岩波書店）ハルオ・シラネ氏（「松尾芭蕉におけるパロディーと異言語混淆」『歌と詩の系譜』所収、中央公論社）など、近年比較文学でめざましい成果が挙げられている〈俳句の詩学〉の進展を楽しみにしたい。

経線

内なる文化の 可能性

〈多元文化社会〉について語られるようになってすでに久しい。異なる民族、人種、文化がいかに関共存するのか——それは単に政治レベルにとどまらない複雑な問題をはらんでいる。最近そのような〈多元文化社会〉の、芸術表現における葛藤を見事に描き出したビデオを見る機会を得た。「アクトセント・オン・ザ・オブビート (Sony Classical Film&Video'94)」である。若手ジャズ・アーティスト、ウィントン・マルサリスの「ジャズ(6つのシンコペートされたムーヴメント)」に、N.Y.シティーバレエ団の振付師ピーター・マーティンスが振付するという、二人の共同制作の過程を追ったドキュメントが、このビデオの主体(後半でバレエ全編収録)となっている。そこに撮られているのは、「ジャズとバレエとの幸福な出会い」というような、ありきたりの謳い文句ではない。周知の通りジャズは〈即興〉を命とするアートである。リズムやテンポが、演奏の度ごとに変化する。それに対しヨ

緯線

今橋映子
(比較文学・比較文化)

ーロッパのバレエ芸術は、その細部の振付の完璧なまでの再現性を追求するために〈モダン〉と呼ばれる領域においてもダンスに音楽を追従させ、そのリズムやテンポをこれほど規制するということを、私は初めて知った。振付師マーティンスと、ジャズマンマルサリスの間には、互いを認めながらも越えられない垣根をめぐって、緊張したやりとりが続く。ジャズ対バレエ、アメリカ対ヨーロッパ、即興対構築といった彼らの美学上の対比の向こうに、このドキュメントは、やはり黒人对白人という〈異文化〉の葛藤をあえて映し出すことを躊躇しない。それはピーター・マーティンスが、ジャズ音楽の「語法」に合わせたジャズ・ダンスの振付ではなく、あくまでも西洋バレエの語法にのっとった振付を選択したことによって強まっている。単なるエクゾチスムではなく、内なる文化の可能性を、他者との対話のなかからひき出してこられるかどうか——それは一つの実験であるとも言えよう。

経線

「自筆原稿」の ゆくえ

今やワープロ、パソコン全盛時代となってしまうと、文学に親しむ者にとって気になるのは、作家たちの「自筆原稿」のゆくえである。宮沢賢治の膨大な推敲の本文校訂のような本格的研究のことはさておき、せよ、自分の好きな作家の、しかも活字でない、生(なま)の肉筆に触れるというささやかな楽しみは、これからはもう失われてしまうのだろうか。

それをつくづく実感させられたのは、昨秋、東京吉祥寺で開かれた金子光晴展(武蔵野市民文化会館)であった。生誕百年しかも戦後50年を経て、この詩人がもっていたしなやかで強靱な精神と、融通無碍な境地は驚くばかりである。そしてそれを強烈に照し出しているのは、他でもない自筆原稿と、書、そして水彩画の数々なのである。私は以前ベルギーのブリュッセルで、彼の渡欧時代の水彩画に出会い、その一端を拙著(『異都憧憬 日本人のパリ』)で紹介したことがあるが、今回の会場でも色紙の絶品「花港観魚」を初めて見る機会を得た。くたゞ水滸(せん)々たる清水に／香

緯線

今橋映子

(比較文学・比較文化)

墨を磨(すり)り／節竹のまゝの毛筆を／ひたして一気に画け……。画面には中国風の楼閣と、茫漠たる柳と水面の影が、淡い緑の色彩を伴って、墨で描かれている。字体は端正という他はない。興の趣くまま、ひたひたと心に満ちる詩情を、抑制のきいた筆で描き留めたという風情である。金子光晴が玄人はだしの画家であることは承知していたが、この破天荒な放浪の詩人が、これほど端正な文字を書く人であることを知らなかったのは、うかつであった。それが書の世界ともなれば、それこそ自由自在、詩「鮫」の一節を切り取る、鋭いくい込むような激しさから、くこれでいいのだから／咲きみだれたコスモスのような二人の少女たちが／あすは一人のこらざるないとしても)とつぶやく、夢のように淡い書まである。それは他の誰でもない、光晴自身が、自分の詩のことばに贈る最良の「解釈」でもある。

——会場は、秋の午後の一刻、原稿や書を、静かに読む人々のかけがえのない時間が流れていた。